加古川市文化財調査報告書第二号

加古川市内石造遺品の調査報告書

永江幾久二

加古川市教育委員会

刊行にあたつて

加古川市教育長
黒田　隆

さきに文化財報告書第一号として、加古川市西神吉町岸遺跡発掘調査報告を刊行いたしましたところ、意外のご好評を賜わりました。このたび、続いて本市社会教育委員永江幾久二氏が市内に散在する石塔・石仏の遺品を詳細に踏査され、西宮市の田岡香逸氏らとともに、年表を審びらかにされましたので、昨年六月にこうした写真資料や拓本の展覧会を開催いたしましたところ、これまた考古関係者をはじめとし、一般の人々にも多大な好評を得ました。

教育委員会といたしましては、その後各方面より、これが刊行についての熱望もありましたので、石造遺品の調査報告書のまとめを永江氏に依託し、更に同氏の石造遺品の研究を加えて、文化財調査報告第二号を発刊することにいたしました。

本市の理事者・議会各位の深いご理解のもとに今回、文化財の保護に関する条例も見るに至りましたことは洵に有難く関係各位に深謝申し上げる次第であります。

ご清鑑を賜わらば幸甚に存じます。

（昭和三十七年三月）

はじめのことば

永江幾久二

加古川市は加古郡印南郡の両郡にわたっている。古墳時代後期にこの地方で、多数の横穴式石室のものを見、又その中に石棺を納めていたことは、この地方の特徴と見られるが、これは竜山石として世に知られた石材に富み、早くよりその切り出し、加工の技術者が住んで居たことに起因することはいうまでもない。生石、石守などの地名が今に残っているのも理由なきことではない。

ここでは中世における石造遺品、主として銘文をともなったものについて、従来の調査を年代によって整理してみようと試みる筈である。平安朝の末から石造塔、石仏、塔婆の造顕が盛んになったが、この地方においては鎌倉時代の後半になって、漸くその遺品を見ることが出来る。さすがに花崗岩を運んで来て作ったものには優秀なものが見られるが、大部分は竜山石といわれる凝灰岩をもって作られていることを知るのである。しかもそのうちわれわれが今日見かける石仏、板碑などの多くが石棺部材によっているのを見ると、鎌倉時代から室町時代にかけて多くの古墳が破壊されたことを物語っている。

石造塔、石仏、板碑の類には紀年銘を刻んだものがあるが、それらについて研究せられたものは、太田氏

の金石年表、武藤誠氏の兵庫県金石年表稿があるばかりで、特に市内のものを今日精査してみると大分遺漏あるをまぬがれない。

県下では特に西宮市の田岡香逸氏、姫路市の浅田芳朗氏がこのことに関心をよせられており、加古川まで再々足をはこばれたが、幸い私は両氏の教示を得て従前知られなかった新資料をも検出することを得た。ことに田岡氏は十数回出張せられ後学の研究に心あたたまる指導を下さったことは感謝の言葉を知らない。

私はそれ等の拓本を作ったが、公民館の辻村清治氏の写真と併せて展観する機会をもった。かかる企てが初めてであったので各方面から非常な好評を賜わった。たまたま加古川市大野常楽寺の宝塔と二基の五輪塔が県の重要文化財として指定せられ、私の調査は意外なところで時を得た。

私は今それ等の資料を一本にまとめようとしている。勿論私の足の及ばなかったこともあるかも知れないから、今後の補正も必要となることと思うが、敢えて発表することとした。御叱正を賜われば幸甚である。私はこの調査中に真摯な先学の調査に伴して親しく教示を得るところがあった。本稿にして見るところありとすれば、それは田岡氏の功に帰すべきものである。同氏に厚く感謝の意を表してはじめのことばとする。

（昭和三十七年三月）

目次

1 平荘神社板碑……3
2 西山板碑……4
3 地蔵寺板碑……5
4 福田寺層塔……6
5 常楽寺宝塔……7
6 報恩寺五輪塔……8
7 報恩寺層塔……9
8 鶴林寺宝篋印塔……10
9 西ノ山板碑……11
10 竜泉寺五輪塔……12
11 中西廃寺阯層塔……13
12 益気神社裏山五輪塔……14
13 今福五輪塔……15
14 報恩寺板碑……16
15 神木五輪塔……17
16 福林寺五輪塔……18
17 報恩寺五輪塔……19
18 天満宮宝篋印塔……20
19 井ノ口常楽寺笠塔婆……21
20 報恩寺五輪塔……22
21 地蔵寺五輪塔……23
22 益気神社裏山宝篋印塔……24
23 安養寺宝篋印塔……25
24 地蔵寺板碑……26
25 常光寺墓地五輪塔……27
26 常光寺墓地五輪塔……27
27 常光寺墓地五輪塔……28
28 常光寺墓地五輪塔……28
紀年銘があって読めないもの……29
伝説の塔ははたして真実か……32
加古川市内の六面宝幢……35
特異なる石塔……36
市外隣接地の新発見資料……38
その他……40

加古川市加古川町大野　常楽寺　文勧慈母塔

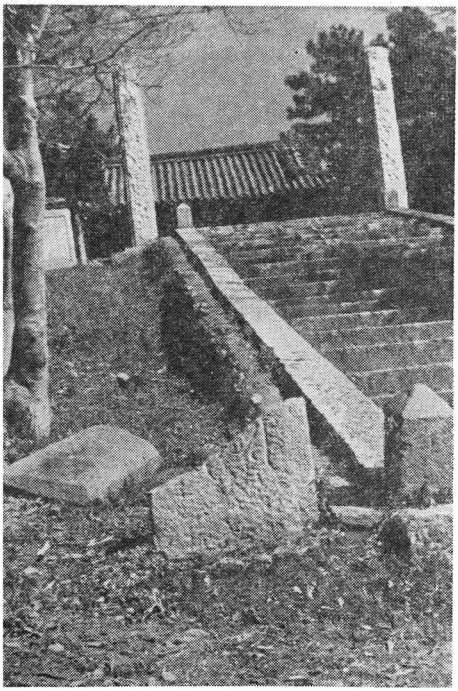
加古川市野口町坂元
旧国道路傍　伝　和泉式部塔　無銘

加古川市東神吉町升田　佐伯寺跡　多宝塔

弘安二年（一二七九）平荘神社板碑

所　在　加古川市平荘町山角平荘神社

平荘神社正面石段下の左右に二枚の板碑がある。右側のものは釈迦三尊種子を、左側のものは弥陀三尊種子を彫っているが、左側のものの下方に、折損して完全ではないが銘文の一部がうかがえる。従来これを発表した人は弘安元年とした様であるが、折損してそれとわからぬとすれば、あるがままに弘安二年とすべきかと考えるので、あえて私は二年と読んでおくことにした。竜山石製。幅六一糎、現高一一七糎。



銘　文

□
弘安二□
僧勝□

弘安四年（一二八一）西山板碑

所　在　　加古川市平荘町西山

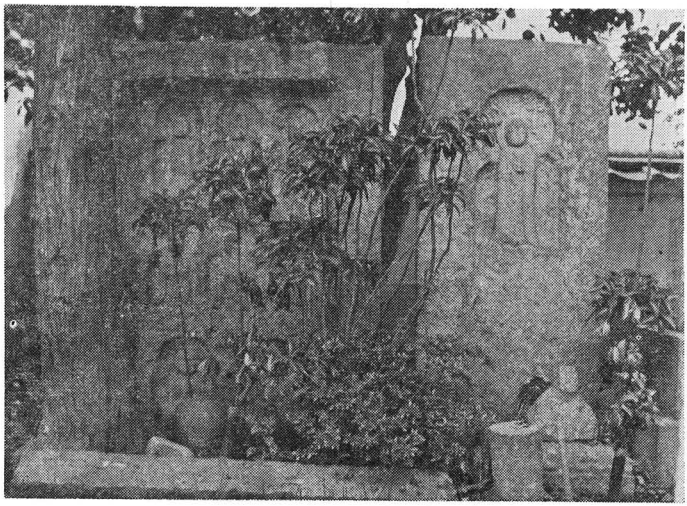
ここには板碑が二枚ある。二面とも弥陀三尊種子を刻んだのであろうが、紀年銘のあるものはなかば以下が失われたか。石棺の底石であったと思えるこの石の左端に銘がある。

銘　文

弘□四□

右の如くであるが、彫りの様子と平荘神社など附近のものと比較して弘安と推定して間違いはないであろう。

現在高さ六五糎、
幅九〇糎、
竜山石製。



弘安四年（一二八一）地蔵寺板碑

所　在　加古川市平荘町池尻地蔵寺境内

門をくぐると左側にある。正面は上方に一体の地蔵立像を刻む。背面は上方に梵字種子、その下に紀年銘を刻む。

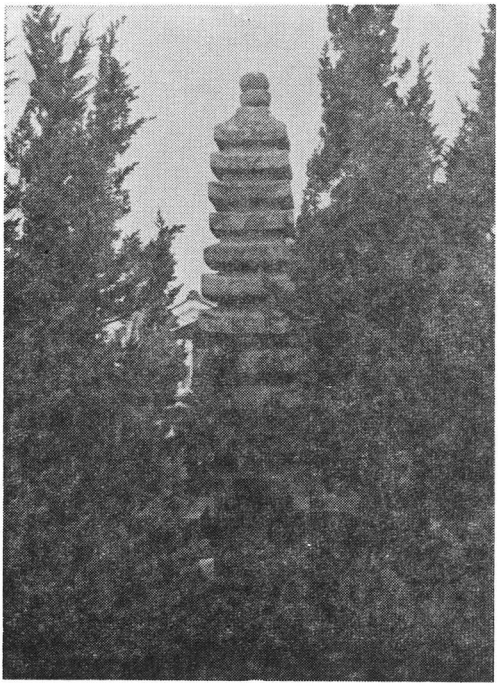
銘　文

弘安四辛巳四月廿日

正和二年（一三一三）福田寺層塔

所　在　加古川市加古川町稲屋福田寺

寺伝によれば福田寺は赤松氏に因縁ありとし、この塔も赤松円心の造立するところとしたが、最近この塔をつぶさに調査された田岡香逸氏により、漸く解読されて造立者も明らかになった。塔身は現在西の面のみが梵字種子（ウーン）で他三面は舟形に彫りくぼめ、各坐像一体を刻む。東面の左右に各一行の銘文がある。



銘　文

正和二年才次癸丑十二月□

願主比丘尼西阿弥陀仏

正和四年（一三一五）常楽寺宝塔

所　在　　加古川市加古川町大野常楽寺

文観上人の造立といわれるもので、左右に五輪塔をひかえている。昭和卅六年兵庫県の文化財に指定せられた。花崗岩製。

銘　文

正和四年乙卯八月日

願主沙弥道智

宝塔につき播磨鑑には「この塔の下に横三尺長六尺の石函を埋む。その中に壺一個有り壺の中に黄金の器あり、其頌に曰く『宝生山常楽寺院主文観大僧正菩薩比丘弘信為遺骨納之』とあり。群書類従には小野前大僧正弘真」とあり、弘信と弘真は同音である。文観の入滅は延文二年の八月であった。

（一頁の写真参照）

正和五年（一三一六）報恩寺五輪塔

所　在　加古川市平荘町山角報恩寺墓地

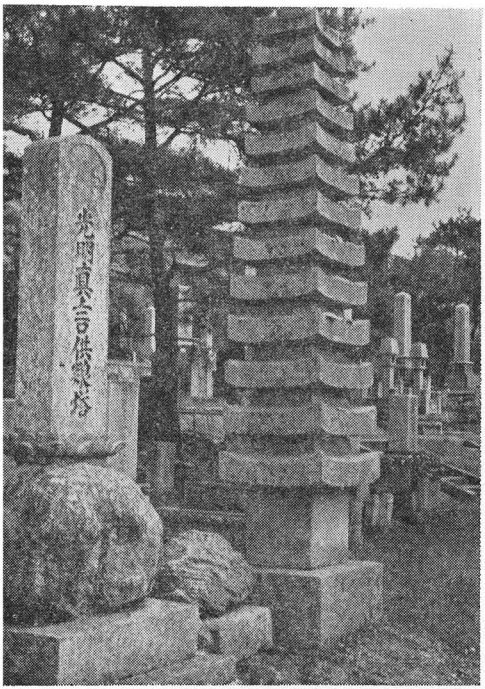
報恩寺墓地に四基ならぶ五輪塔群の北から三番目のもので、四基のうち一番大きい。いまのところ在銘のものでは播磨最古の五輪塔といわれている。花崗岩製。高さ一米九〇糎。

銘　文

正和五季丙辰八月日
宇都宮長老

元応元年（一三一九）報恩寺層塔

所　在　加古川市平荘町山角報恩寺



本堂の西に十三重の層塔がある。現在相輪を欠いているが、別に後補したとかいわれるものが保存されているとか。基礎の西面に銘文がある。常勝寺は当時の塔中であったという。花崗岩製。

銘　文

常　勝　寺
元応元年己未
十一月六日

暦応二年（一三三九）鶴林寺宝篋印塔

所　在　加古川市加古川町北在家鶴林寺

この種の塔では、在銘品として市内で一番古いものである。花崗岩製。現高一米七五糎。相輪は上半を欠失している。塔身は月輪中に蓮華座をつくり金剛界四仏の種子を四面に配している。基礎正面下端の中央に埋納口を造っている。こうしたつくりは常楽寺の宝塔にも見られた。

銘　文

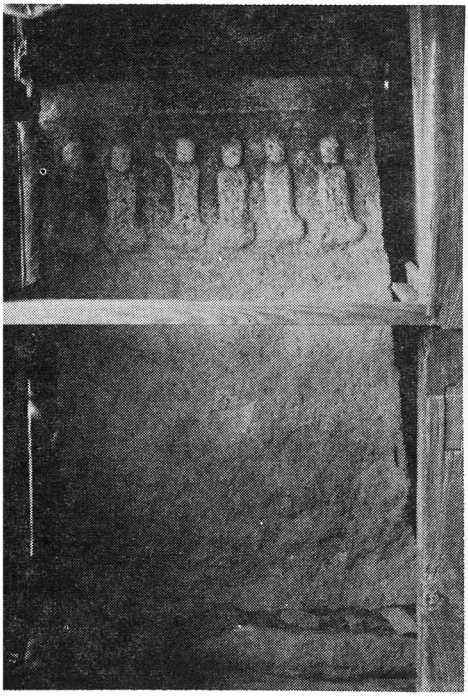
暦応二年己卯三月八日

勧進僧□慶

康永元年（一三四二）西ノ山板碑

所在　加古川市神野町西ノ山大師堂

蓮花座上にそれぞれ六体の立像を横に一列に浮き彫りしたもので、下に銘文を刻んでいる。六地蔵のつもりで作られたものであろうか。現在は堂内にまつられており、高い腰板張りで銘文はうかがうことを得ないが、部落会長坂田氏の好意で腰板を排して調査することを得た。竜山石製。石棺材によるものか。

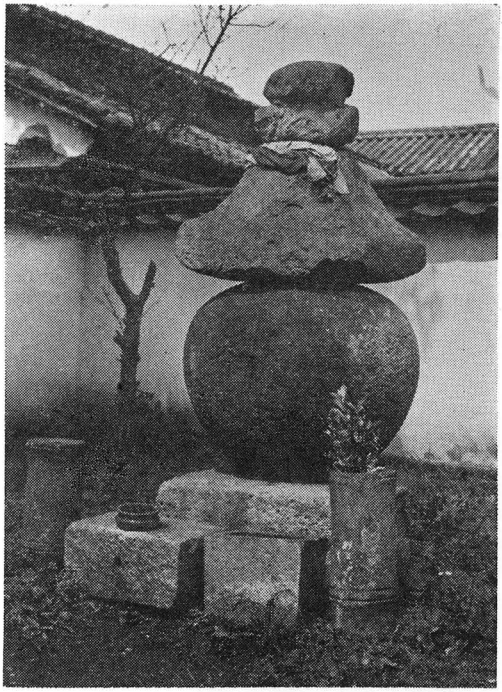


銘　文

右造顕志趣者為
二親并□□頓
証菩提乃至法
界平等利益也
康永元季八月日
願主上村□盛泰
敬　白

康永三年（一三四四）龍泉寺五輪塔

所　在　加古川市加古川町平野龍泉寺



この塔はもと官道脇にあったものであるが、道路拡張のため竜泉寺に移されたものである。水輪のみ花崗岩製であるが、他は竜山石を石材としている。

銘　文

法界衆生
平等利益

康永三年甲申潤二月一日
大勧進沙弥定蓮
敬白

貞和三年（一三四七）中西廃寺阯層塔

所　在　もと加古川市西神吉町中西の堂垣内にありしもの。これは画家橋本関雪氏が買い取り、持ち出したというが、現在は所在不明。私は京都市銀閣寺畔の関雪の白沙村荘まで調査したが遂に知れなかった。今は島田清氏の教示による。

銘　文

貞和三年

三月□□

貞和五年（一三四九）益気神社裏山五輪塔

所　在　加古川市平荘町平山益気神社裏山

益気神社背後の山上に三基の石造塔がならんでいる。左端の五輪塔が一番大きい。各輪とも正面に梵字種子を刻んでいる。

銘　文

貞和五年己丑十一月日

一結衆

文和二年（一三五三）今福五輪塔

所　在　加古川市尾上町今福延命寺

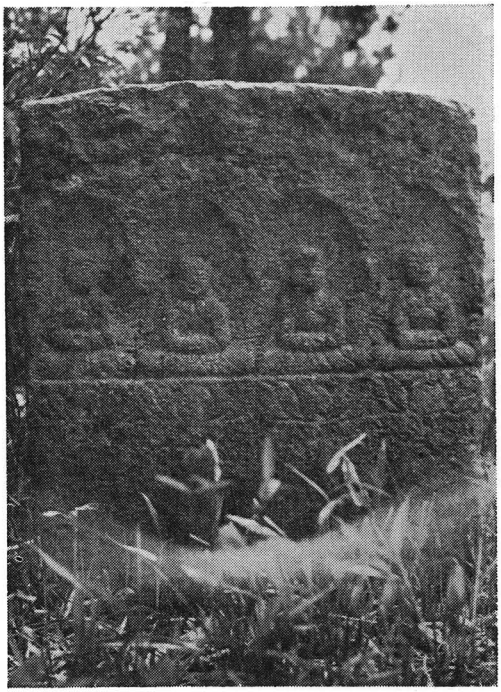
これはもと尊福寺の支配地薬師堂前にあったが、薬師堂転退のため、昭和の初め頃他の石塔類とともに現在の場所に移されたという。

銘　文

文和二年
二月廿五日
一結衆等
白敬

文和二年（一三五三）報恩寺板碑

所　在　加古川市平荘町山角報恩寺

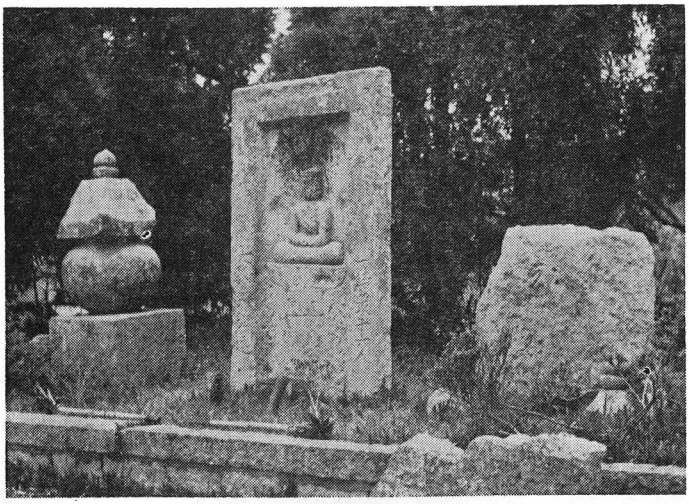


これは竜山石製で、石棺材を利用したものであろう。蓮華座上に四体の坐像を浮き彫りしたもので、中央坐像の間に文和二年、左端と次との間に二月と割り書している。

銘　文

文和二年

二月



延文五年（一三六〇）神木五輪塔

所　在　加古川市平荘町神木東林寺跡

明治初年まであったという東林寺跡の一段高いところに石棺材による大きな石仏と並んで五輪塔がある。花崗岩製で、高さ一米五五糎。屋蓋のいたみが甚だしい。銘文は基礎の左側によせて二行に。

銘　文

延文五年十一月中旬
千部経一結衆等

貞治二年（一三六三）福林寺五輪塔

所　在　加古川市加古川町備後福林寺墓地

福林寺の墓地にはほぼ同形の五輪塔が二基ある。そのうちの一基に銘文がある。

銘　文

右志者為法界
衆生［平等利益］
貞治二年癸卯
三月十八日
一結衆等敬白

貞治六年（一三六七）報恩寺五輪塔

所　在　加古川市平荘町山角報恩寺墓地

報恩寺墓地に四基ならぶうち北端のもの。花崗岩製である。

銘　文

貞治六丁未
覚誉大徳
十月廿一日

応安三年（一三七〇）天満宮宝篋印塔

所　在　加古川市平荘町養老天満宮境内

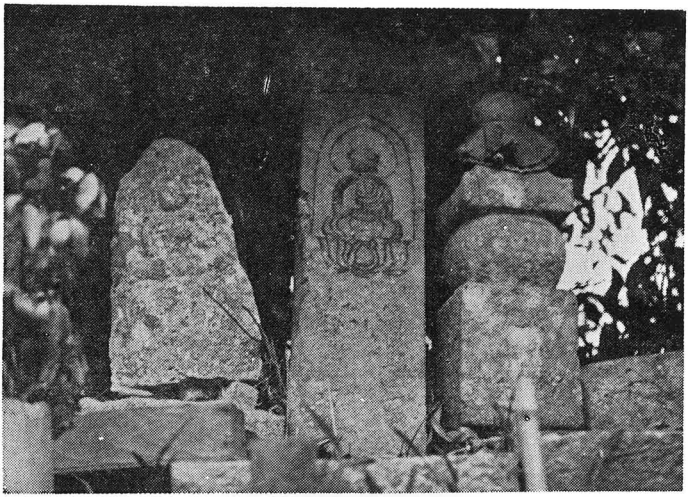
反花を有する基壇上に立ち、やや小型ながら造りは立派である。格狭間中に蓮華の浮き彫りをなし、左右に銘文を刻む。現在、相輪を欠く。花崗岩製。

銘　文

融通百万遍結衆

応安三年十月日

銘文から融通念仏に関係あるものと考えられている。



永徳二年（一三八二）井ノ口常楽寺笠塔婆

所　在　加古川市上荘町井ノ口常楽寺

もと常楽寺の中心であった山上の堂に通ずる道の右側にある。正面上部に定印の坐像を刻み、その下二行の銘がある。高さ九七糎。竜山石製。

銘　文

自日光寺一丁
永徳二八廿南阿

田岡香逸氏によれば、永徳二年八月廿日南無阿弥陀仏の意であるという。

応永十年（一四〇三）報恩寺五輪塔

所　在　加古川市平荘町山角報恩寺墓地

報恩寺墓地の四基ならんでいるもののうち南端のもの。花崗岩製。

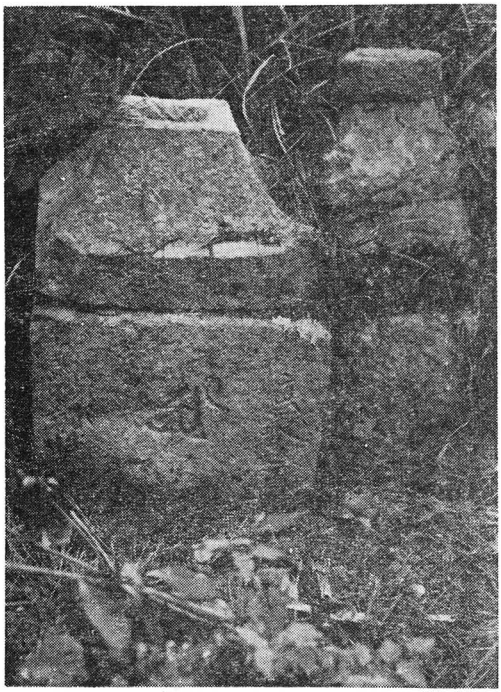
銘　文

応永十癸未
八月二日
当寺第七長老
利海大徳

※　写真一九頁参照左端

応永十八年（一四一一）地蔵寺五輪塔

所　在　加古川市平荘町池尻地蔵寺墓地



地蔵寺墓地の一番奥に基礎だけが残っている。

銘　文

応永十八年　二月
二日

沙弥性寿

文安四年（一四四七）益気神社裏山宝篋印塔

所　在　加古川市平荘町平山益気神社裏山

竜山石製。蓮華座をもった二重基壇の上に立つ。不釣り合いに高い伏鉢をつけているが、相輪は上半がない。塔身は月輪中に梵字種子を刻む。

銘　文

文安四年

丁卯十月十三日

写真一四頁参照中央

永正十四年（一五一七）安養寺宝篋印塔

所　在　　加古川市平岡町一色安養寺

安養寺には赤穂義士にゆかりのあるという塔のあることを思い出して調査してみたら、全く時代があわないことがわかった。安養寺には宝篋印塔が二基あるが、銘文のあるのは庫裡の内庭のものである。これは竜山石製で造りはやや粗雑な感じがするが、格狭間の作りに他に見られぬ特徴がある。

銘　文

勧　進

永正十六年（一五一九）地蔵寺板碑

所　在　加古川市平荘町池尻地蔵寺墓地

地蔵寺墓地の最上段に三枚の板碑がある。左端のものは上部が三角形にとがっているが、切り込みも額もない。上方三ツの月輪中に三尊種子を刻み、中段四角形にほりくぼめた中に二体の坐像を並べている。その下方に銘文を見る。

銘　文

永正十六
二月　日

天正四年（一五七六）常光寺墓地五輪塔

銘　文

天正四丙子年
一張
八月九日

天正十七年（一五八九）
常光寺墓地五輪塔

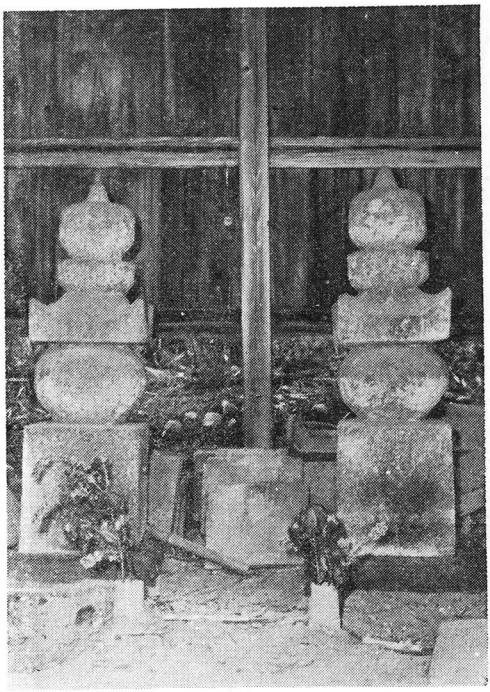
銘　文

天正十七年己丑
宜雲葦讃禅定尼
三月廿六日

慶長四年（一五九九）常光寺墓地五輪塔

銘　文

慶長四年
儀芳妙性信女
五月廿一日



慶長六年（一六〇一）常光寺墓地五輪塔

銘　文

慶長六年
心犀寿謙居士
八月十七日

右の四基はいずれも加古川市神野町常光寺墓地に所在する。これ等の五輪塔は全部一石彫成だといわれているが、実は天正四年のものは一石彫成ではない。慶長の二基は別に小堂の中に安置されているが、これは故なきことではないと考える。それは、心犀寿謙居士は地方豪族加古氏の出身で、入道して寿謙と号し常光寺を中興した人の墓である。儀芳妙性信女はおそらく寿謙の妻であったと推定してあやまりないであろう。

紀年銘があつて読めないもの

これ等の石造遺品の造顕は造立者がその意趣を永く世にとどめようと試みたことは勿論であるが、多年風雪にさらされ風化磨滅により折角彫りつけた文字も今では読みとることも出来なくなったものが少なくない。

常樂寺層塔

所　在　加古川市加古川町大野　常　楽　寺

これはもと蓮花寺にあったものを現在の地に移したということである。花崗岩製で、塔身の四面に梵字種子を刻み、現在東面に銘文がある。

銘　文

□□□二年乙丑潤七月

延命堂宝篋印塔

所　在　加古川市加古川町木村字北条

天明二年の木村寺社明細帳には延命堂の名は見えないから、その後になって改められたものであろう。地内に墓碑が多いから寺跡であるかも知れない。ここには宝篋印塔と重製六角宝幢とがある。宝篋印塔は竜山石製ではあるが巧致に出来ており、正面格狭間中に天蓋と宝瓶三茎蓮を浮き彫りしている。左右に銘文が有るが殆んど読めない。

ここの宝幢は他所のものよりも短寸で、一面は一四糎×二七糎で、蓮華座上に立像を刻む。

永昌寺前板碑

所在　加古川市神野町西条永昌寺前

竜山石製の家形石棺の蓋である。裏側に大きな坐像一体を刻み、下方左右に小形の立像を彫ったものである。

銘文

――――二年一月日

円明寺五輪塔

所在　加古川市東神吉町天ヶ原　円明寺

竜山石製で、地輪は風化のために銘文のところが剝落しようとしている。高さ一米五八糎。銘文はさだかでないが暦応四年とも読める。何れにせよ南北朝頃のものであろう。

常樂寺地藏板碑

所在　加古川市東神吉町神吉　常楽寺墓地

これは竜山石製の小形石棺蓋を加工し

て使用したもので、地蔵立像を刻んで居る。左右の輪廓に銘文を刻んでいるが、風化がひどくて読みづらい。

銘　文

大願主□□□□

□□□□八月十九日

釈迦堂地蔵板碑

所　在　加古川市東神吉町神吉釈迦堂

竜山石製の小形家形石棺蓋に地蔵尊を陽刻したるもので、印南郡誌のいう釈迦堂の本尊であったのであろうか。

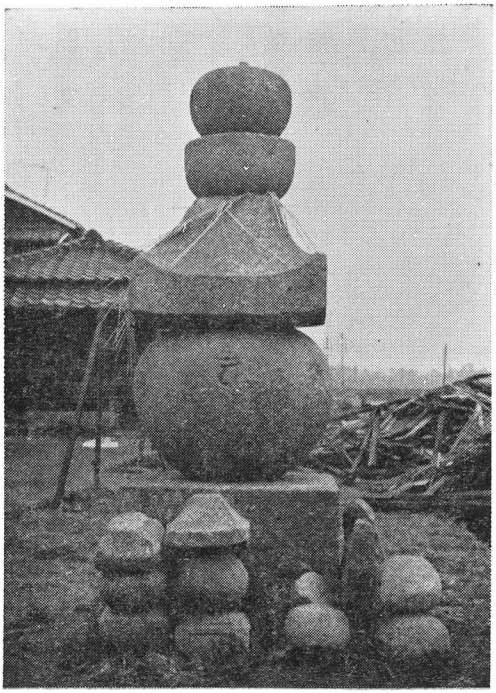
銘　文

□□□十年八月廿四日

浅田氏は右の二碑とも永正としているが、今少し古いのではなかろうか。

伝説の塔ははたして真実か

坂元にある宝篋印塔は和泉式部の塔と伝えられ、新在家の五輪塔は足利左馬頭義氏の塔だという。神野常光寺北側雑木林中の五輪塔は寺では開祖赤松義村の墓だといい、一方、西条の沼田氏の系図を見ると赤松則村に従って功のあった沼田朝輝のために子俊敬が建てた塔だとする。はたしてそうだろうか。五輪塔には時代の風というものがうかがえるが、そうした推定と右の伝説が一致するだろうか。

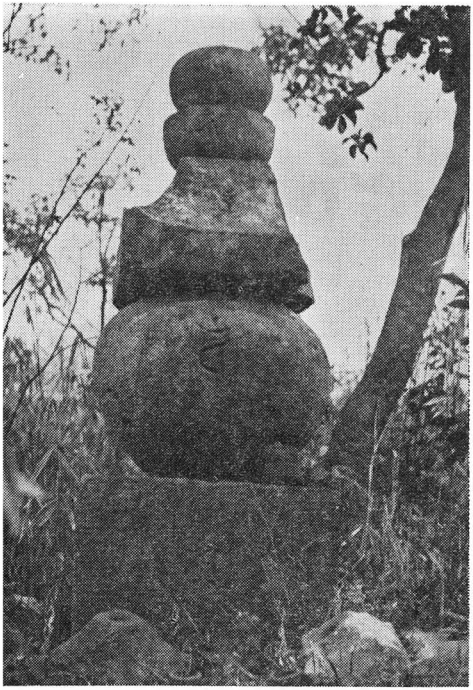


新在家の五輪塔

坂元の宝篋印塔は野口町坂元にある。最初の位置から移っている様であるが、播磨鑑や播州名所巡覧図絵などにも記載があり古くから人に知られた塔である。花崗岩製で完全。高さは二米五〇糎。堂々たる姿は第一級の作といえるであろう。殊に格狭間中の蓮花の浮き彫りは四面とも図案をことにし、まことに豪華である。附近の良野にも花崗岩製無銘の宝篋印塔があるが、作風は類似している。坂元の宝篋印塔は和泉式部の墓だと伝えられるのであるが塔は無

銘で語るところがない。式部は性空上人を訪ねて書写に参ったというから、その高名の故に道中因縁を求めたものも作られたであろう。青山村には和泉式部の腰掛石というのがある。和泉式部の塔だという説が固定してしまったのであろう。（写真二頁左参照）

新在家の五輪塔は平岡町新在家の旧国道筋にある。竜山石製で高さは二米余、無銘である。水輪の四面に四門の種子を刻む。播州名所巡覧図絵は「足利左馬頭義氏の墓というあり」とする。



常光寺五輪塔

足利氏から分家した加古氏が加古郡一円を領したのは永仁以前であった。加古氏の系図を見ると、加古義氏は延文三年に尊氏より三木郡で一庄を加えられているが、次第に赤松氏の押領に遭い、一族で義氏のみが故地に残って蟄居したという。

その後利氏が赤松義則から本領を安堵され更に領地を与えられて備前に移って行くのであるが、上記から考察すると、利氏は備前に移るにさきだち父祖以来の故地を回復し、この地を去るにあたって、先祖菩提のために建てた

の説はあるがこれは加古義氏を誤まったものだろうと考えている。私はここの五輪塔を南北朝時代と見るがこれなれば時代が一致する。　（三二頁写真参照。）

常光寺五輪塔、これは常光寺の北側の雑木林の中にある。竜山石製。銘はなく、高さは一米七五糎である。各輪四面に四門の種子を刻む。常光寺は赤松義村の墓だというが、義村は大永元年死亡したもので、この五輪塔が南北朝の前期を下らぬものと推定されるから、義村の墓とする説はあやしい。

又、一方沼田氏は新田義貞の目代としてこの地にやって来た沼田志摩守の後裔である。文明十四年五十八才で死んだ父の菩提のために入道した俊敬が、祥光院殿のために造顕したと系図中に記している。常光寺はもと祥光寺といったという。特別な開山に祥光院殿という戒名を贈ったのであろうが、赤松義村も祥光院殿、沼田朝輝にも祥光院殿、どうも一基の五輪塔を二人が争っている様でおだやかではない。しかし塔は冷然と見る人にまかせているのであろう。　（三三頁写真参照）

加古川市内の六面宝幢

加古川市加古川町備後の福林寺と、東神吉町神吉の真宗寺に六面宝幢のあることは知られていたが、池田観音寺のものをふくめてこの三つ以外にはないのかと思っていたら、今度の調査で、

加古川町　称名寺　　加古川町木村　如意寺　　加古川町木村　延命堂

八幡町宗佐　常観寺

などで見つかった。延命堂のものを除けば、いずれも単制で造顕の年代もほぼ南北朝時代のものといえるだろう。池田観音寺のものが花崗岩製であるばかりで他は全部竜山石製である。

尚、これら六角宝幢のほか、神野町石守と福沢の善証寺とで笠塔婆が発見された。石守のものは四面とも高く突き出した蓮華座上に坐像を刻んでいるが、福沢善証寺のものは、四面上半に蓮華座にのる立像を彫り、一面のみその下に二体の坐像を並べている。右の一体は有髪の如く見ゆるところから、おそらく父母の菩提のために造ったものではなかろうか。これなど特異なものといえよう。

この寺に古い宝篋印塔があったり、こんな塔婆があるのはおかしいと調べて見たら、これは寺家町の最上寺が廃寺になって、石塔類は同じ竜門寺末の善証寺へ移されたことがわかった。寺家町最上寺の三世月津和尚が、福沢善証寺の初代になっていることもわかった。

特異なる石塔

佐伯寺阯多宝塔

所在　加古川市東神吉町升田

これは伝によればもと佐伯寺という寺があったというから、その寺のゆかりのものであろう。佐伯寺は播磨鑑によると慈覚大師開基ということになっている。

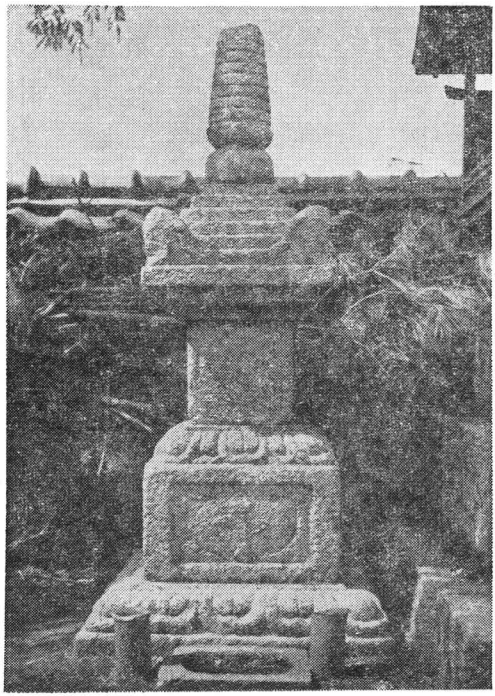
塔は竜山石製で、二重基壇の上にたち、高さは二米。銘文がないので造立の年代を明らかにし得ない。塔身は周囲に額縁を作り、月輪中に蓮華座をおいて四門の種子を刻む。正面のみはその上に更に大日を加えている。屋根は軒の厚さ七、八糎、長さ八一糎で両端がわずかに反っていて安定感があり、上層は軸部が太鼓の胴の様で、蓮弁十二枚がこれをめぐっている。伏鉢は八個の円形をつらね、請花の雄勁な彫と相対している。こうした造りから鎌倉時代のものと推定される。

印南郡誌は播磨鑑を引用して、この寺の鐘が今、三木市久留美の慈眼寺にあるという。鐘銘によると、播州印南郡益田村佐伯寺鐘、延慶二己酉四月廿四日とあるという。

この鐘をもつ当時の佐伯寺の寺勢から考えると、かかる石造多宝塔があったとするのも無理ではないと考える。　（写真二頁右参照）

安養寺宝篋印塔

所在　加古川市平岡町一色安養寺



安養寺の在銘宝篋印塔については別に記すところがあった。これは花崗岩製無銘のものである。この寺は赤穂義士の一人中村勘助の子勘次が住みこんで何代目かの住職となったというので、その人が父勘助の菩提のため造顕したと信ぜられたのがこの宝篋印塔であったという。高さ一米二八糎でやや小さいが、形はととのった立派なものである。正面格狭間中に宝瓶三茎蓮を浮き彫りしている。惜しむらくは銘文を逸していることであるがいずれにせよ忠臣蔵では時代が合わない。

市外隣接地の新発見資料

国安五輪塔

所在　加古郡稲美町国安地蔵山

割合に不便な所であった為、従来金石文の研究をやった人達もこの地域は未調査に終っていたようである。郷人は昔の城主の墓であるという。基礎の西正面に左の銘文がある。

銘文

一　結衆
二十人

応安元戊申年三月廿八日

花崗岩製。高さ九八糎。

国安宝篋印塔

所在　加古郡稲美町国安地蔵山

上端に反花座をつけた二重基壇の上に立つ、塔身は月輪中に蓮華座をおいて種子を刻む。町内、岡の寺にある「氏神由来」に「明徳元年庚午の潤三月八日に氏宮の東方に宝篋印塔造立有之、弁財天女の本地薬師にて候故、薬師如来、乃至阿闍弥陀釈迦大日五智の如来勧請有之候」とあり。

宝篋印塔の基礎正面に銘あり、右に符合す。

銘　文

明徳元庚午潤三月日

毎月八日□養

一結之諸衆等敬白

善立寺宝篋印塔

所　在　高砂市高砂町西宮町船津重次方

現在は船津重次氏の有になっている。この基礎のみが某旧家の墓域にあったという。銘は前面の左右と格狭間の間にある。

銘　文

弘治二年

権少

僧都

空真

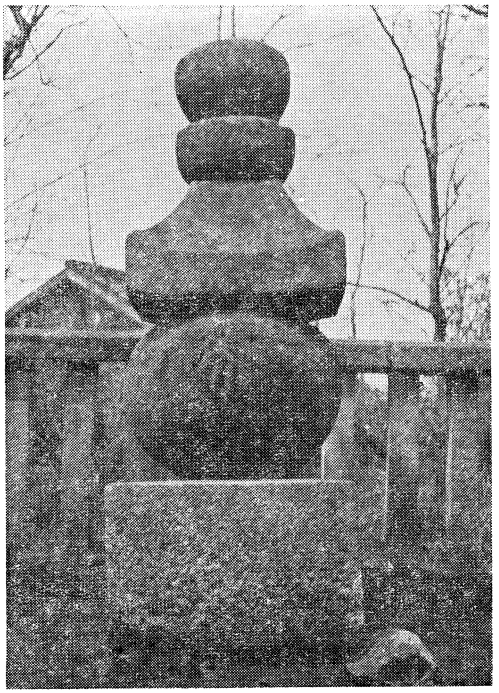
四月八日

その他

紀年銘のあるものや、特異なものについては上記して来たが、慶長以前の造立と思えるものはその他にも沢山ある。

層塔では日光山常楽寺の内庭に七層ばかりのものが見られた。

五輪塔では野口教信寺に教信上人の廟所といわれるものがあり、備後福林寺には在銘品のほかに大体同時代頃のものと思われるものがある。又、私は別府町域かと思っているが、浜ノ宮中学校の南方住宅の庭内にも一基ある。野口町長砂には石ノ塔という字地に塔がある。この五輪塔が字名になったのであろう。



教信上廟人所

東神吉町西井ノ口にある五輪塔は塔身上部が空洞になっているらしく、三角に切り込んだ穴からそれがうかがえる。日光山常楽寺の山上には無銘であったが、立派な花崗岩製のものがあった。

宝篋印塔では野口町良野のものがある。相輪の一部を欠いているが、開花蓮華の彫がよい。教信寺から掘り出されたという篋宝印塔が多数あったらし

いのであるが、今はその一部が東の田の中に並べられている。水足の墓地にも一基あるが、これは右のうちの一つを移したものと聞いている。室町時代も終り頃のものであろう。

石棺蓋石を利用した石仏、板碑の類は多い。尾上町養田、平荘町養老、同じく里、小畑、一本松、西神吉町大国、同じく宮前などであるが特異なものといえば、西神吉町岸の墓地にある三尊種子板碑であろう。これは家形石棺のうち側に深い月輪を刻み、更にその中に種子をあらわしている。銘文は見られなかった。神吉地蔵堂の石棺材の石仏、天ケ原のコケ地蔵もわすれられないものである。

昭和三十七年三月三十一日
〈加古川市文化財調査報告書第二号〉
著者　永江幾久二
発行　加古川市教育委員会
印刷　富田啓文堂